

## 「人とは何ものなのでしょう」（要旨）

### 聖書箇所：詩篇8篇 1~9節

#### 【1】力強く偉大な神と無力な乳飲み子

詩篇8篇は、神の栄光を讃える「頌栄」に始まり、「頌栄」で結びます。「主よ 私たちの主よ あなたの御名は全地にわたりなんと力に満ちていることでしょうか」(9:1a,9)

詩人は、ことばを尽くして、力強く偉大な神を讃えます。かつて、最高の技術を駆使し、最良の資材を惜しげなく用いて神殿を建てたソロモンが「それにしても、神は、はたして人間とともに地の上に住まわれるのでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」(II 歴代6:18)と神を讃えたようにです。決して人間が近づくことのできない神の偉大さを讃えているのです。ところが、最も偉大な神が、最も小さき者の代表である、幼子、乳飲み子の口を通してご自分の力を打ち立てられたと続きます(1b~2)。実に不思議です。

今朝は、そうした神の偉大さとその不思議に感嘆したダビデの「人とは何ものなのでしょう」(3~4)という投げかけに注目します。

#### 【2】人とは何ものなのでしょう

「あなたの指のわざである あなたの天あなたが整えられた月や星を見るに 人とは何ものなのでしょう。」(3~4a)

ダビデが生まれ育った中近東。空気も乾燥しており月や星の美しさは格別でした。イスラエルを取り囲む古代オリエントの諸民族は、月や星を神々とししました。しかし彼は、そうした天体に対して感嘆の声を上げたのではありませんでした。踏み締める大地のみならず、宇宙にも秩序を与える神。そのお方を前にして「人とは何ものなのでしょう」と続けたのです。

ここで言う「人」(エノシュ)は、弱くて脆い人間を意味することばです。そして「人の子」

(ベン・アダーム)は、「赤土より出たもの」という意味を持ちます。羊飼いであったダビデは毎晩の星空を眺めたことでしょうか。彼は戦いの最前線で野宿したことも、逃亡先の洞窟で一夜を明かしたこともありました。たとい野獣や敵の襲撃によって命を失っても、月や星は変わらずに輝き続けることを知っていました。彼は人が弱くて有限であることを実感していました。

#### 【3】人を心に留め、顧みてくださる神

けれどもダビデはそこで止めませんでした。「あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。」(4b)

「人」に向けられた神の眼差しに、ダビデは驚いているのです！「心に留める」は、単に覚えていることではなく、人のために神が働きかける様子を表わします。「顧みてくださる」は、関心を持って近づくという意味があります。それだけではありません。神は人を神に似せたものとして創造し、神の栄光と誉れの冠をかぶらせてくださった、というのです(5~6)。

「人とは何ものなのでしょう」。人とは弱く有限な存在です。それにも関わらず、神が心に留め「栄光と誉れの冠」をかぶらせてくださった代わりにきかない特別な存在です。

▷私たち(人)は、イエス・キリストの十字架の犠牲を通して、自分のいのちの価値を知ることができます(伊ヤ43:4)。

